

コモロの歴史では、特にガジジャではスルタンたちが治めていた。それぞれの地方にはそれぞれスルタンがいた。これから私が話すのは、私の地方で、ハマハメ、ワシリ、ブワクといったところで我々は隣人同士だった。

ブワクには、独裁的に地方を治めているスルタンがいて、拷問や虐殺が日常茶飯事だった。スルタンの名はフェ・ジンダといった。彼には子供たちがいた。女の子と男の子だった。そのうち、息子が権力を握るに違いない日が来るようになっていた。彼は、星回りを見るために、魔術師のところに会いに行った。息子に合う星を見つけた後、彼は願いをかけた。

「息子の治世の時に、息子がブワク、ハマハメ、ワシリを治めるように」。

ところがハマハメはこのスルタンの庇護の下にあることを望んでいなかった。星占いは陸ではなく海で行わなければならなかった。未来のスルタンは海に送っていかれた。3つの星を占うには、3つの地方(の星)が現れることが必要だったが、ハマハメは現れなかった。スルタンの魔術師には、ハマハメにも魔術師がいて、星回りを守っているのでハマハメが現れなかったことがわかった。だから、フェ・ジンダはこの地方を治めることはない。スルタンはなおも願ったが、最後には諦めた。魔術師シマイが、自分の地方が現れないように、できるかぎりのことをしたとわかったからだった。そこでフェ・ジンダはブワクとワシリを治めた。

このスルタンには、彼が妻たちに会いに行くために、村から村へと海を渡る時に、運んでくれる漕ぎ手たちがいた。ラマダーン月の間、彼はハツインディカシェザニで断食をやめ[日没を迎え]、ワシリで最後に食事をするのを好んでいた。

ハツインディの漁師たちは、断食をやめる[日没を迎える]とすぐに、フェ・ジンダをショモニまで海上を運ばなければならなかった。そしてその後でないと自分たちの村には帰れなかった。彼を運ぶ丸木舟は一艘しかなく、お供もいた。

ある時、漁師たちはよく考えてから互いに言った。

「わしらはいつまでこういう生活をするのだろう。これはまともじゃない。スルタンはわしらのことを何とも思っていない。毎日運んでやっているのに、わしらのことを他の連中のようにひどく扱っている。何とかしないといけない」。

彼らは、スルタンに対して陰謀をめぐらすことにした。スルタンはワシリに運ばれ、そこで断食を中断し、それからハツインディへ寝に戻るのを望んでいた。漁師たちは計画を実行することを決めた。一艘の丸木舟がスルタンを運び、他の二艘がいつものようにそれに続くが、もう一艘を遠くに隠しておくことにした。

ところでスルタンはいつも、陸のすぐ近くから丸木舟に乗るようにしていた。その日はそうではなかった。スルタンは変更の理由を尋ねたので、[漁師たちは]波を避けるためだと答えた。しかし、彼は漁師たちが自分に対して陰謀を企んでいることを全部わかっており、彼らに目的を尋ねた。漁師たちは答えた。

「わしらはあんたにはもううんざりしてる！ 毎日、あんたを運んでいるのに何の報いも受けていない。だからあんたを殺すことを決めた」。

「私を殺す？ それはやめてくれ。いいか、お前たちがみたこともないものをやろう」。

漁師たちはあまり頭がよくなかったので、彼らはスルタンが金か他のものを褒美にくれようとしているのだと思った。そうして、スルタンはもう丸木舟には乗ることを頼まず、村に留った。彼は部下に命じて、漁師たちを捕らえ、足裏の皮を剥いだ。それから、自分たちの丸木舟を担がせた。足の裏の皮を肉まで剥がされて彼らは自分たちの丸木舟を担いだ。彼らは、ショモニの高地まで歩いた。彼らは村に留まることを許されず、世を捨てて生きなければならなかった。彼らの足には最早それほどのものは残っていなかった。何週間もの間、彼らは[世を捨てて]住み、誰も訪ねることを許されなかった。もし、彼らの家族の一人が彼らを見に行こうとしたら、隠れなければならなかった。傷が癒えると彼らは小さな村を作った。それ以降、足の裏の皮を剥がれた彼らの子孫は、砂の上でも、裸足で歩くことが出来ない。彼らはいつも靴を履いて歩く。

この頃も、フェ・ジンダがスルタンだった。よく言われるように、神以外には主はおらず、人間ではない。

ある時、彼の娘が病気になった。彼女は既に結婚して、ワシリのジンプワ・ナンガに住んでいた。彼女の病は魔術師の水薬でも治らず、悪くなっていった。スルタンは別の魔術師を来させた。最初の魔術師は、スルトンの娘が生き延びる見込みがないとわかっていたが、そのようには言えなかった。もう一人の魔術師はスルタンに言った。

「数日ください。私は薬を持って戻ってきます」。

彼は何日か後に戻って、非常に古いコモロ風の暗喩的で洗練された物言いで、娘が三日後に亡くなると述べた。この言葉にスルタンは何も言えなかった。娘は予告されたとおりに、三日後に亡くなった。

しかし、この不幸もフェ・ジンダには何の教訓にもならず、彼は暴君のスルタンであり続けた。ブロンクでは、結婚を望むすべての娘について、父親がフェ・ジンダに許可を願う必要があった。その上、未来の夫はその娘がスルタンと床を共にする前には、一緒になれなかった。スルタンがまず処女を奪い、それから彼女は夫と一緒にになったのだった。

ある日、一人の若い娘が結婚することになった。そして、彼女の父親がしきたり通りに、まったく有難くなくても、フェ・ジンダの許を訪れなければならなかった。若い娘は落ち着いて、両親に心配しないようにいった。彼女は、スルトンの元で過ごした女たちに、それがどのように運ぶのかを尋ねた。彼女たちは答えた。

「あなただけが彼と居て、衛兵たちは外にいます」。

若い娘は相変わらず落ち着いていた。彼女は短剣を砥ぎ、腰巻の中に慎重に隠した。その頃はドレスもスカートもなかったので女性は腰巻を結わえていた。

その日が来たので彼女はフェ・ジンダの許に連れて行かれた。彼は至福の時を過ごす準備をしていた。彼も同じように自分の短刀、つまり若い娘を貫くペニスを研いでいた。そして娘を部屋に入らせた。娘の家族は外で待っていた。スルタンは自分の腰巻を取り去り、娘の上に覆いかぶさった。娘はスルタンに言った。

「挨拶もおっしゃらないし、どこから来たかとも聞かないし、元気なのかともおっしゃらない」。

スルタンは彼女の言うことは尤もだと思ったが、それが彼への罫だとは知らなかった。彼女は自分の腰巻をゆっくり解いて、ひそかに短剣を取り出した。スルタンは娘の中に入ろうとしたが、彼女は言った。

「私にさせてください。私が導きます」。

そして彼女は短剣を両足の間に置いた。スルタンはされるに任せ、娘は彼のペニスを掴んで短剣で切り落とした。彼女はスルタンの口を押さえ、彼は叫ぶことが出来ずに床の上にぐったり倒れた。誰も何が起こったのか知ることもなかった。いつもは、先に[部屋を]出るのはスルタンだったが、この日は娘が先に扉を開けた。衛兵たちは、彼女の足取りがしっかりしていて、処女を奪われたばかりの娘のようではなかったので、妙に思った。スルタンはいつまでたっても出てこなかった。衛兵たちは部屋に入り、スルタンが、性器を切り取られて死んでいるのを見つけた。

スルタンが死んだことを知らせる喇叭が鳴らされた。ブワンクの町は、シェザニから来たこの娘にどう感謝してよいかわからなかった。この日から、牛の肉を分けるときは、人々は、多くの若い娘を救ったこの勇敢な家族の子孫に一番おいしいところを取っておくのが常になった。